

「ほんなん」 しています。

わだいのこじん

12

瑞穂の国

スローフードという言葉があります。1980年代半ばにイタリアの小さな村から始まった運動です。地域の伝統的な食事や食材を見直し守ろうというもので、日本にも紹介されました。その後日本では、有機農産物や地産地消の食生活、自動車に頼らずゆったりとした生活をしようというスローライフの動きも出てきました。都会の生活に疲れた人が、田舎の自然や生活体験の中で心と体をリフレッシュしようというグリーンツーリズムとも関連します。

この流れに並行しているのが農業や農村活性化への期待です。最近、よく聞くのが農業の六次産業化、農業に一次

(生産)、二次(加工)、三次(販売)産業的な機能を付加し、地域産業の活性化を図ろうというもので、農業後継者さん、加工や販売に関わる企業の方、地域再生に取り組む民間団体の方、指導的立場の行政の方など、お会いすればほぼ一様に口にされる言葉になっています。

日本は古代より「豊葦原の瑞穂の国」とよあしはらのみずほのくに」と表現され、アシの原のように豊かに広がる黄金の稲穂が実る稲作風景が日本を象徴する原風景とされています。しかし、この農業が立ち行かなくなった、そこで、この美しい風景や豊穡を維持してきた業と生活時間の中に、スローの名の下にたくさん人の活性化への期待を放

忙しいスローフード

り込み始めました。農村が衰退傾向にある一番の原因は、経済と後継者の問題ですが、これが解決しないまま、市場の競争原理に巻き込まれざるを得ない、瑞穂の国のスローライフは、今とても忙しい、といえます。

近道はありますか？

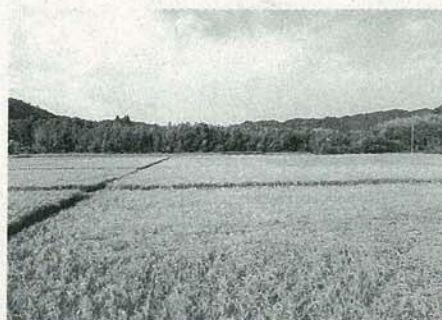
先日、大学の近くで借りている田で稲刈りを行いました。和歌山県には豊かな地域資源

や伝来の知恵がたくさんあり、和歌山で学ぶ学生にとって、それを活用させていたただかなくてはもったいない。でも最近、気を付けようと考えていることがあります。調査や研究よりも学生の存在、そのものを活性化に結びつけて期待されがちだからです。農林業や商業などの現場で学生の人気は抜群です。町や村のあちこちで一生懸命に動く学生の姿は、明るい話題となり、マ

スコミにもよく取り上げられます。でも、学生の参加は、地域活性化の切り札にはならない、学生が地域を知り、学びの中から判断力を身に付ける、そのずっと先に、次の社会の担い手としての期待があるのが本来の姿です。



米プロジェクト稲刈り(和歌山市梅原にて)



稲穂が実る(8月、那智勝浦町にて)

した。ひもで一定量を束ねますが、これを稲架(はざ)にかけて乾かす際にグサグサにならないように結ぶ頃合いが大事です。しゃがんだまま稲を束ねては結ぶ、根気のいる地道な作業です。

この地道な農作業の中で、学生たちは何を学んでくれたのでしょうか。農業や農村が抱える多くの問題解決に近道はない、学生を地域に連れ出した責任として、流行のスローライフな川の流れの一時の祭りに参加させてはいけない、幾度も自分に言い聞かせているところです。

プロ
フィル



湯崎 真梨子(ゆざき・まりこ)
和歌山大学地域創造支援機構 特任教授、地域創造支援マネージャー
専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。